

散文のひと

——国立療養所大島青松園在住者の死——

阿部 安成

4

これまで10年ちかく大島をフィールドとしてそこにかようなかで、訪問の回数が増えその頻度も高まってきたためか、在園者の死にふれることが多くなったようにおもう。

国立療養所大島青松園（以下、大島青松園、とする）では日に数回の園内定時放送がある。非定時の放送の1つが、悲しいお知らせです、に始まる訃報で、これまでに2度聞いたとおもう。その死が知らされたおひとは島外の病院でお亡くなりになり、翌朝の船で島にもどることとなった。その日の高松港で、ご遺体はストレッチャとともにあった。

島でおこなわれる葬儀には、園長など「園側の幹部」も臨席する慣わしになっている。あるとき、彼ら彼女たちひとりの出席もなかったことがあり、それへの憤慨を在園者から聞いた。調査時に食事をいただく機会が設けられ、その場でいっしょになった方がお亡くなりになったこともあった。

2012年11月20日に大島在住者と電話で話したとき、曾我野一美さんが危篤とうかがった。その数日後、彼の訃報が新聞記事となった（たとえば、『朝日新聞』2012年11月24日東京本社朝刊第38面）。そこには大きな文字の見出しで「元ハンセン病原告団会長」とあり、「高知県出身で、18歳でハンセン病を発病。20歳の1947年に大島青松園に入所。国を相手取った国家賠償請求訴訟では、ハンセン病訴訟全国原告団協議会の会長を務めた」と故人が紹介されていた。11月23日逝去、享年85歳。ひとりの療養所在住者の死だった。

曾我野さんの訃報記事掲載はたまたま、渋谷アップリンクでのドキュメンタリー・フィルム『61ha 絆』の上映初日だった。そのフィルムの出演者も大島在住者だった。フィルム批評の文章に曾我野さんについても書き始めたところ、批評の稿をまとめるのに時間がか

かり、他方で曾我野さんの執筆稿の目録がまとまったので、べつな稿としてここに発信することとした。

本稿で、大島に生きた曾我野一美さんの追悼をあらわす。彼の死去をきっかけとして、わたしたちの調査をふりかえり、また、曾我野さんの執筆稿をさかのぼって、それを記録することとした。

◇
3

わたしにとっての曾我野さんは、元ハンセン病原告団長、元全国ハンセン病療養所入所者協議会会長、元国立療養所大島青松園協和会（自治会）会長というよりも、大島のキリスト教信徒団体であるキリスト教霊交会のかつての代表だった。大島での調査場所を文化会館図書室から霊交会教会堂へと移すときに、文字どおり、教会堂の戸を開けてくださった方が曾我野さんだった。好きにどうぞ、だったか、ご自由にどうぞ、だったかのことをかけてくださったように覚えている。それ以前にもさきに記した肩書きをとおして彼の名を知っていたが、このときの教会堂訪問が曾我野さんとの初めての邂逅だった。ことば数の少ないむつかしそうなひとにみえた。

そののちに霊交会代表がかわり、曾我野さんとは日曜礼拝が終わったあとの教会堂図書室で、高松港の棧橋で、大島の道で、いくどこかお会いしたり、大島の白寿会が主催するカラオケ大会でご挨拶なさるお姿を大島会館でおみかけしたりしたが、わたし（たち）の大島での作業をお伝えする機会はほとんどなかった。

霊交会教会堂で現代表から曾我野さんにあらためてわたしが紹介されたときに、霊交会の創設年について説明をもうしあげたことがあった。かつて霊交会の創立 80 周年を記念して、1994 年に『癩院創世』（土谷勉著、原著 1949 年発行）が再版され、そこに当時の霊交会信徒代表だった曾我野さんが「再版に当たって」と題した文書を寄せた。『癩院創世』には、霊交会の会員規則が転記され、「その規則の最後に記された期日が「昭和三年十一月十一日」となっているのである」と着目されるとともに、他方で同書にさきだって霊交会創

立 50 周年の時に刊行された『霊交会 創立五十周年記念誌』（霊交会、1964 年）には、「霊交会の大先達であった故石本俊市氏」によって、同会の組織化が「大正三年」と記されたことも確認済みだった。後者の記述について曾我野さんは、「石本さんという折目正しい几帳面な人が、確信を持って書かれた文言である」と尊重し、また、前者の記載事項をめぐっては、『癩院創世』のべつな箇所に「このようにして霊交会は創立された。三宅の絶えざる熱禱によって生れ、神への涙ぐましい献物だった。思えば彼がこの島へ渡って二十年目」と記されていることと、「著者土谷氏の「あとがき」によれば、長田さん〔長田穂波——引用者による〕が書き遺した原稿を土台にして、それに肉づけしたとあることからして、本書の文言の真正を否定することはできない」との判断から、曾我野さんは霊交会創立年について、2 つの史誌の記述から、「どうしたものか迷」うこととなってしまった。

石本、穂波、土谷によせる曾我野さんの敬意と信頼が彼を迷わせることとなった。慎重な曾我野さんの判断に対して、過去の『霊交』紙上の記載をみれば、霊交会の創立が大正 3 年=1914 年であることははっきりしていると、お伝えしたように覚えている。このときはまだ『霊交』初期の号がみつかっていなかったかもしれない。霊交会のかつての機関紙『霊交』の現存分は、1922 年=大正 11 年発行号にさかのぼれるので、この点からも創立昭和 3 年はありえないとわかる。ただこのとき、創立年確認のための材料を示してもさほど驚きになられたようすもなかったもので、そうした事情はすでにご存じだったのかもしれない。このていどのちょっとした立ち話だったので、曾我野さんはわたしのことをついぞわかっておられなかったとおもう。

高松港栈橋でもまたちょっとした立ち話の機会があったのは、2010 年の瀬戸内国際芸術祭の開催期間のことだったろう。この芸術祭会場の 1 つとなった大島における展示について、その「目玉」がかつて大島の療養所で使用されていた解剖台だと報道されていた。この展示作品解剖台のことを話題にすると、こんな冷たい台のうえで解剖するとはなんて酷いことだったんだ、と少し語気荒くおっしゃったようにおもう。ただこれもほんの数分の短い立ち話に終わった。

白寿会のカラオケ大会会場で曾我野さんをお見かけしたときも、この芸術祭前後のころ

だったとおもう。予防法による隔離から説き起こされる開会のご挨拶に、伝承者としての意気と気魂を感じた。会場に島外のものほとんどいないところで、若い職員はもしかしたらべつとして、多くのものにとって既知のことをあえて話すのだから、これは彼自身にとって、たとえくりかえしとなろうともいわずにはいられないことがらなのだ、わたしには感じられた。

訪島のさいに在園者からそのときどきの島のようにすをうかがうなかで、曾我野さんのご不例の話題が増えていった。日曜礼拝のために、坂のうえにある教会堂へのぼることも少なくなったとのことだった。

最後に曾我野さんのお姿を拝見したのは、昨 2011 年秋の青空市のときだったとおもう。そのときは介護員さんの押す車椅子に乗っておられた。

2012年12月27日にNHKEテレ大阪で放送された「ハートネットTV かかわらなければ」は、大島青松園を1つの舞台としていた。そこにほんの一瞬、曾我野さんのお姿があった。いつの撮影かその情報は示されなかったが、車椅子ではないようにみえた。お元気に歩けるころの撮影だったろうか。

2

訃報にせってしてから、せめて大島青松園で発行された逐次刊行物『青松』誌上の執筆稿目録をつくろうとおもい、まずはひとりで、2回めは石居人也といっしょに国立ハンセン病資料館図書室で作業をし、それを終えて2012年12月29日に大島へひとり渡った。たとえばJR西日本の年末ダイヤは12月30日からとなる。うっかり事前に官有船の時刻を確認しなかったところ、29日から年末年始ダイヤが始まっていた。大島青松園のHPをみればそれがわかる。高松港の待合室にはなんの掲示もなく、隣の青松園高松事務所にはその貼紙がしてあった。わかりづらいことは確かだ。無駄に時間を過ごす破目にいくらか苛立ったが、島に渡るとそれもすぐに消えた。わざわざの在園者のお迎えは、やはりうれしい。

大島で霊交会の方にお会いした。曾我野さんの葬儀はかなりの規模となったとのこと。

弔電と弔問者の多さに「全国区」との表現を用いておられた。この稿のはじめにあげた、曾我野さんがおつとめになった役目ゆえのことだろう。わたしは曾我野さんをよく知る機会を持てなかった。ではだれのことならよく知っているのかと、意地悪な問いの礫が投げつけられたら困ってしまうが。全国の療養所での自治を束ねる活動や、国家賠償請求訴訟での法廷闘争について、わたしはまだまだ勉強不足である。

いくつかの曾我野さんの文章を拝読したなかで、ずいぶんと早い時期から療養所の事態をめぐって、「終焉」や「終末」の語を使っておられることが気になった。それは遅くとも1980年代の文章にあらわれている。信仰とのかかわりでいえば、療養所の教会はそのはじまりからいずれ療養者がいなくなるとともに消滅するとの趣旨の文章をくりかえしお書きになっておられた。その1つをあげると、「療養所の中の教会というのは、そもそも、有限の存在であって、入所者が居なくなれば、その時点で教会生活は終る。そういう約束の上に成り立っている教会である（前掲「再版に当たって」1994年11月11日付。11月11日は霊交会の創立記念日）、とのことだ。ここでの「約束」とは、療養者のいう「社会」とのあいだに結ばれたそれなのか、あるいは神とのあいだのことなのか、わたしにはわからない。

つねにお終いを自覚するこうした見極めは、澹泊と形容してよいだろうか。さきにみた『癩院創世』の「再版に当たって」のなかで、そこに三宅や穂波を「指して「島の聖者」と表現したところ」があることをとらえ、彼らふたりは「偉大な人格者であり、愛の人だったとする記述からすれば、当然の尊称と受けとめるべきであろう」と受け入れながらも、しかし、聖書に照らせば「神以外はすべて罪人ということであり、聖人などいる訳がない」のであって、「その意味では聖パウロも、聖ペテロも、あるいは聖ヨハネも反聖書的であり、敢えて尊称を用いるとすれば、パウロ先生でよいだろうし、ペテロさんでよく、また三宅さんや長田さんでよいということである」とも記している。ここにも曾我野さんのひととなりがよくあらわれているとおもう。あっさりとした、きっと鷹揚なところのあったひとなのだろう。

近年はことのほかよくお酒をお飲みになっているとひとから聞いた。いくにんかの訪問

者がすぐにお酒をすすめられたとのことだが、わたしにはとうとう曾我野さんのお相伴にあずかる機会がなかった。それを残念におもう。ひとを比べるとは、無遠慮で無責任な第三者の徒^{あだ}なふるまいに感じるところがある。お酒を好きなひとでも下戸もいる。飲んで陽気になるひとでも黙って飲むひともある。どちらがどうということもない。島から外に出て果敢に活動した稀有なひととして、その痛飲も鯨飲も傍でなにかいうことではない。もっとも活動と飲酒はべつな次元であって、いっしょにどうということではないかもしれない。

①

曾我野さんは活動の広さゆえに、寄稿先のメディアも多かったとおもう。ひとまずわたしのできるどころか始めようと、『青松』の最新号から過去にさかのぼって曾我野さんの稿を探した。現在から 1960 年までがわたし、1949 年の創刊号から 1950 年代発行号までを石居が閲覧を担当した。ふたりして『青松』のすべてのページを繰った。曾我野さんの寄稿は、短文の「あとがき」もふくめると 100 をこえる。その多くが、「自治会会長」「全患協会会長」という役職にあつての執筆であつて、随筆も短歌や俳句のたぐいがまずなかった。余計な比較をまたすれば、詩集に聖書解釈書に随筆など多彩多作な文筆のひと穂波、編集と文書整理と芝居を好むがゆえにそれを得意としたらう石本、随想を文章とすることを持続した土谷たちと比べると、曾我野さんが文章を綴るという機会は、なにより職務としてあつたようにみえる。『青松』への最初の寄稿が、「私の表情」(『青松』通巻第 69 号、1952 年 3 月)と題されたご自身の描写であり、つぎがその稿と同じ号に掲載された「背」という題の詩だった。『青松』誌上に発表された数少ない曾我野さんの随筆と韻文である。もとの気質や趣向のゆえか、就いた役職の役目のためなのかわからないが、曾我野さんはいちずに散文のひとだった。

早くとりまとめて公開することを優先して作成した目録は、確認の時間もなかったため、誤りが多いのではないかと危惧する。『青松』で曾我野さんの追悼号を組むかどうか、同誌 2013 年 1・2 月号掲載稿の締切となる 2012 年 12 月 10 日までにその連絡はなかったし、

その後もどうなるか、まだその方針をわたしは知らない。同誌 2013 年 3・4 月号にも本稿に掲載した目録を載せる予定だが、判型が小さく紙面が二段組みとなる『青松』では、載せられる書誌情報が限られるだろうから、まずこの Working Paper Series で目録を発信することとした。この目録はわたしと石居との共作となる。

いずれももっとも適切な方が、曾我野さんご経歴やひととなり『青松』誌上かどこかに執筆するだろう。わたしたちは曾我野さんのもっともみぢかにあった媒体^{メディア}であろう『青松』に記された彼の生の軌跡を目録としてまとめることを、曾我野さんへの弔悼とした。『青松』の表紙題字にいく人もの方が筆をふるった。その通巻第 600 号(2004 年 9 月)の表紙から、題字は曾我野さんの筆となった。最新号にもみえるその字は、大島の松の伸びぐあいとすっきりと目に鮮やかな色をあらわしているような気がする。

目録には、掲載された稿の論題(副題は採録したものとそうでないものとに分かれた)、巻号数(第 63 巻第 1 号通巻第 614 号を 63(1)614 と略記)、発行年(2006 年 1 月 5 日を 060105 と略記)、誌面奥付に記された編集、発行、その代表者を順にあげ、備考には曾我野さんの署名脇にしるされた役職名を記した。(終わり)



2012 年 12 月 29 日に大島の教会堂へゆくと、玄関脇にいつもはない黄色い薔薇の鉢植えがあった(上左)。展示作品解剖台の近くにはパンジーが植えられていた(上中)。この日はマフラーをしていると暑いくらいの暖かさの小春日和だった(上右)。

高松では「瀬戸内国際芸術祭 2013」のポスターをみるようになった。泊まったホテルのエレベーター内にはそれとかかわる「せとうち島あそび」のポスターがあり、男木島、女木島などとならんで大島もとりあげられ、そこに「おだやかな時間の流れる大島」との紹介があった。大島ではなにか特別な時間があるわけではない。隔離の場として特別視する

ことと、憩いや癒しの島として過度に愛でることとは表裏の関係で、わたしはどちらも不適切だと感じる。また、「大島は国立療養所大島青松園があり、島全体が病院のようなもの。ハンセン病回復者が静かに暮らされていますのでご理解の上お出かけ下さい」との指示もみえる。これはへんだ——「病院のようなもの」とはどういうものなのか?、「暮らされています」とは敬語表現なのだろうがそれもおかしく（わたしなら「お暮しになられています」と記す）、「ご理解の上お出かけ下さい」というときなにを理解せよというのか不明だ、と憤慨したくなる。

わたしの2012年最後の訪島となった12月29日も、霊交荘のまえには2台ものコンクリートミキサー車がアイドリング状態で停車し、その五月蠅さは不快の度を越した。2012年の大島も大土木工事の年となった。ミキサー車のまえの家にはきょうはひとがいる、耐えられないほどに五月蠅いと工事業者の警備員に告げたが、なにをいわれたかわからないようすだった。その騒音はもちろん在園者が立てているのでも、彼ら彼女たちが望んで鳴っているのでもない。こうした生活騒音とかたづけられない轟音を、「せとうち島あそび」の主催者はどう考えるのだろうか。少なくともミキサー車のすぐ隣には、「おだやかな時間」など流れてはいない。

「ご理解の上お出かけ下さい」との要請は、だから「あそび」にゆくものたちも静かに過ごせということなのか、「島全体が病院のようなもの」だから、その場にふさわしい「あそび」をしなさいといたいのか、こうした曖昧な指示はなんの効果もないとおもう。

前回の瀬戸内国際芸術祭2010をきっかけとして大島に渡るひとがそれ以前と比べると格段に増えた。これは期間中に島に渡ったときに、目の当たりにした。それはひとまずよいこととおもう。また、さきにふれたドキュメンタリー・フィルム『61ha 絆』をみたのちに島を訪ねたひとが、ついこのあいだひとりいたとも聞いた。これは意外だった。

いくつものきっかけをとおしていくにんものひとが大島にでかけるようになるとは、ひとまずよいこととおもう。その体験によってなにを知るのか。わたしも好きなカフェシヨルで六方焼を食べて美味しいと感じるだけでは、大島にふれたことにすらならない。(2012年12月30日追記)

†

2013年1月15日の電子メールで、『青松』2013年3・4月号が曾我野さんの追悼号となるとの連絡が、同誌編集部からあった。かなりの寄稿数になるとおもう。『青松』のほうがこの Working Paper Series よりも、曾我野さんを知るひとが手にするだろうから、さきにも記したとおり、いくつかの項目を削ったうえで、追悼号にも本稿掲載目録の抄録を載せることとした。Microsoft Excel で作成した目録を整えたり、それをさらに同 Word の文書に変換したりする作業を、滋賀大学経済経営研究所の研究サポートによっておこなった。同研究所のスタッフに感謝もうしあげます。(2013年1月21日追記)

論 題	巻号数	発行年月日	編 集	発行者	代表者	備 考
ハンセン病差別と戦い続けて	63(1)614	060105	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	平成17年6月23日ハンセン病フォーラムより
年頭にあたって	62(1)604	050105	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
風吹けど、月動かず	61(7)600	040905	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として。この号から表紙題字が曾我野となる。
二年連続の会長就任に当たって	61(4)597	040505	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
年頭のご挨拶	61(1)594	040105	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
沖縄・奄美におけるハンセン病政策の責任について	60(10)593	031205	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入所者自治会会長」として
熊本「判決」転載も四回目に!!	60(9)592	031105	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入所者自治会会長」として
判決－三度目の掲載にあたって	60(8)591	030905	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	*
むずかしい法律用語の連続です	60(7)590	030805	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入所者自治会会長」として
『らい予防法違憲国家賠償請求訴訟事件』判決文を誌上に掲載するについて	60(6)589	030705	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会々長」として
老骨に鞭打って	60(4)587	030505	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
故人中石俊夫氏を悼む	59(4)577	020505	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「代議員会議長」として
我が国、日本との比較の中から	60(2)585	020205	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	*
ただ、歳月の長さを言うなかれ	58(9)572	011105	青松編集委員会	国立療養所大島青松園協和会	富田幹雄	「自治会代議員会議長」として
新年を迎えて	56(1)544	990105	中石俊夫、 藪内真琴	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
ハワイ・モロカイ島・ハンセン病 (回復者)の施設カラウパパ等訪	55(9)542	981105	中石俊夫、 藪内真琴	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
愛宕山 入る日の如く	55(4)537	980505	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
年の始めに当たって	55(1)534	980105	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入所者自治会会長」として
全療協本部事務局長殿一敢えて ～村上論文について	54(10)533	971205	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「大島支部長」として
菊池恵楓園に於ける全療協第四 十九回支部長会議に参加して	54(7)530	970805	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会会長」として
お爺投手・続投の弁	54(4)527	970505	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として、爺に「じん」とルビ
年頭のご挨拶	54(1)524	970105	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会会長」として
式辞	53(7)520	960805	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会会長」として。 「らい予防法の廃止に関する法律」施行記念式典

らい予防法改廃問題に関する総括	53(6)519	960705	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会会長」として
遥かなる道を辿りて	53(4)517	960505	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会々長」として
年頭のご挨拶	53(1)514	960105	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会々長」として
『天の時』を大事にする	52(9)512	951105	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
予防法問題の早期決着を!!	52(8)511	950905	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	*
くたばれ!!昭和二十年／失せろ!!八月十五日	52(7)510	950805	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	*
全患協第四六回支部長会議に参加して	52(6)509	950705	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
瀬戸内ブロック会議を主催して	52(5)508	950605	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
隠居から現役への弁	52(4)507	950505	中石俊夫、 湯浅一忠	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会々長」として
新年を迎えるにあたって	50(1)484	930105	中石俊夫、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会会長」として
「風の舞」プロジェクトその発端と完成まで	49(9)482	921105	中石俊夫、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
第四二回全患協定期支部長会議の開催地を担当して	49(6)479	920705	中石俊夫、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
就任の挨拶	49(4)477	920505	中石俊夫、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
出たところ勝負・ヤツツケ仕事か	49(3)476	920405	中石俊夫、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	目次では「編集部」、本文末尾に「曾」の署名
表紙説明	49(2)475	920205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
あとがき	49(2)475	920205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
表紙説明	49(1)474	920105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	*
あとがき	49(1)474	920105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
在りし日の土谷勉氏	49(2)475	920105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名

故曾我野一美『青松』掲載稿
目録

表紙説明	48(10)473	911205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾我野」の署名
あとがき	48(10)473	911205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
表紙説明	48(9)472	911105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
あとがき	48(9)472	911105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
表紙説明	48(8)471	910905	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾我野」の署名
あとがき	48(8)471	910905	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「曾」の署名
あとがき	48(7)470	910805	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「そがの」の署名
あとがき	48(6)469	910705	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「そがの」の署名
あとがき	48(5)468	910605	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「そがの」の署名
あとがき	48(4)467	910505	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「そがの」の署名
表紙説明	48(3)466	910405	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「そがの」の署名
あとがき	48(3)466	910405	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本隆久	「そがの」の署名
表紙説明	48(2)465	910205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
あとがき	48(2)465	910205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
表紙説明	48(1)464	910105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
あとがき	48(1)464	910105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
表紙説明	47(10)463	901205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
あとがき	47(10)463	901205	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
表紙説明	47(9)462	901105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名

あとがき	47(9)462	901105	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
表紙説明	47(8)461	900905	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
あとがき	47(8)461	900905	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
表紙絵について	47(7)460	900805	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「曾我野」の署名
あとがき	47(7)460	900805	曾我野一美、 瀬戸口裕郎	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「そがの」の署名
重荷と気迫と根気と	46(3)446	890405	*	国立療養所大島青松園協和会	中石俊夫	「全患協会長」として
有終の美を飾るために	45(3)436	880405	*	国立療養所大島青松園協和会	神崎正男	「全患協会長」として
予防法問題について	43(8)421	860805	*	国立療養所大島青松園協和会	山本照夫	「全患協会長」として
再び、らい予防法問題について	43(1)414	860105	*	国立療養所大島青松園協和会	多田勇	「全患協会長」として
昭和61年度予算要求の統一行動 を終って	42(8)411	850905	*	国立療養所大島青松園協和会	多田勇	「全患協会長」として
昭和六十年年度の課題と具体的対 応について	42(3)406	850405	*	国立療養所大島青松園協和会	多田勇	「全患協会長」として
その存在意義と環境	41(6)400	840805	*	国立療養所大島青松園協和会	中石俊夫	「全患協会長」として
全患協会長就任に際して	40(8)392	830905	*	国立療養所大島青松園協和会	山本輝夫	*
社会福祉コースに招かれて	40(6)390	830705	*	国立療養所大島青松園協和会	山本輝夫	*
差別と偏見と対策と	39(5)379	820605	*	国立療養所大島青松園協和会	多田勇	*
年頭にあって	39(1)375	820105	*	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「入園者自治会会長」として
歓迎の挨拶 8500名全会員の期 待に応える会議に	38(7)371	810805	*	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「大島支部長」として
式辞 50年の歴史をふまえ命と生 活を守る闘いを	38(5)369	810605	*	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
石本俊市兄の在りし日を偲んで	37(2)356	800205	*	国立療養所大島青松園協和会	岡本清	「キリスト教大島霊交会信徒代 表」として
年の始めに当たって	36(1)345	790105	*	国立療養所大島青松園協和会	曾我野一美	「自治会会長」として
新春断章的放談	33(1)315	760105	縄田正直	大島青松会	*	「自治会会長」として
体験からの訴え	32(8)312	751005	縄田正直	大島青松会	*	「自治会会長」として。「らいを 正しく理解する集い」
年頭にたそがれを思う	30(1)285	730105	縄田正直	大島青松会	*	「患者自治会会長」として
国民のみなさんに訴える	29(9)283	721105	縄田正直	大島青松会	*	「全患協代表」として
会議余録	28(7)271	710805	縄田正直	大島青松会	*	全患協第18回支部長会議
年頭雑感	28(1)265	710105	縄田正直	大島青松会	*	「患者自治会々長」として
故野島名誉園長追悼号発刊に当 つて	27(5)259	700605	縄田正直	大島青松会	*	「入園者代表」として

作業問題について	25(8)242	680905	前川一郎	大島青松会	*	*
朝日訴訟について	23(8)222	660905	前川一郎	大島青松会	*	*
今後の要求活動の姿勢について (二)	23(3)217	660405	難波良造	大島青松会	*	「自治会々長」として
今後の要求活動の姿勢について	23(1)215	660105	難波良造	大島青松会	*	「協和会々長」として
作業管理返還の問題について	22(1)205	650105	難波良造	大島青松会	*	*
作業管理返還の問題について	21(10)204	641205	難波良造	大島青松会	*	*
あとがき	21(9)203	641105	難波良造	大島青松会	*	「曾」の署名
編集後記	21(8)202	640905	難波良造	大島青松園	*	「曾」の署名
編集後記	21(7)201	640805	難波良造	大島青松園	*	「曾」の署名
あとがき	21(5)199	640605	難波良三	大島青松園	*	「曾我野」の署名
あとがき	21(4)198	640505	難波良造	大島青松園	*	「曾我野」の署名
あとがき	21(3)197	640405	国分正礼	大島青松園	*	「曾」の署名
あとがき	21(1)195	640105	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「そがの」の署名
放言漫歩(一)	20(10)194	631205	国分正礼	大島青松園慰安会	*	*
あとがき	20(10)194	631205	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	20(4)188	630505	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	20(3)187	630405	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	20(2)186	630210	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	20(1)185	630110	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	19(10)184	621205	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	19(9)183	621005	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
あとがき	19(8)182	620905	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾」の署名
あとがき	19(7)181	620805	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
再編成問題をめぐって:土谷私案 を料理する	18(9)172	611005	国分正礼	大島青松園慰安会	*	座談会出席者のひとり
編集後記	18(9)172	611005	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
編集後記	18(8)171	610905	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
後記	18(7)170	610805	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
編集後記	18(6)170	610705	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
後記	18(5)168	610605	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野」の署名
ある医師の見解にももの申す	18(4)167	610505	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「曾我野健」の署名
編集後記	17(2)154	600205	国分正礼	大島青松園慰安会	*	「S」の署名。曾我野か齊木か、 次号編集後記は齊木
総代の椅子(一)—自治会運営の 一年を願て—	15(1)131	580105	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	*
弔辞	14(9)128	571005	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	「入園者総代」として

「国際ライ会議」に野島園長の出席を念願する	13(1)109	560120	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	*
大部屋掃除の与論とその実態	108	551220	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	*
整備三カ年計画の行方	102	550510	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	*
菌の財産	94	540910	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	*
「らい予防法案」を見て—衆院厚生委員会、ライ小委員会の方々	78	530505	国分正礼	大島青松園 大島青松園患者協和会	国分正礼	*
老朽家屋について—危険感過剰か・そうではない—	76	530305	野島泰治	大島青松園 大島青松園患者協和会	野島泰治	*
二重の桎梏	73	521110	野島泰治	大島青松園 大島青松園患者協和会	野島泰治	*
禁煙協定	70	520505	野島泰治	大島青松園 大島青松園患者協和会	野島泰治	*
背	69	520305	野島泰治	大島青松園 大島青松園患者協和会	野島泰治	詩
私の表情	69	520305	野島泰治	大島青松園 大島青松園患者協和会	野島泰治	*